

企画展示「津波被災からあらわれた直筆資料 — 杳太郎の〈敬愛〉、鷗外の〈微笑〉 —」

期間 2018年6月7日(木)～7月11日(水)

会場 愛知県立大学 長久手キャンパス図書館 1階ロビー

主催 愛知県立大学日本文化学部、

不安と生の研究会、

愛知県立大学長久手キャンパス図書館

協力 県立神奈川近代文学館、伊東市立木下杳太郎記念館、

巨理町立郷土資料館、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク

<企画展示>

「津波被災からあらわれた直筆資料 — 杳太郎の〈敬愛〉、鷗外の〈微笑〉 —」

水を、わたる。

木下杳太郎は「海」と親しく生き立ちました。伊東の生家から眺める海は、杳太郎にさまざまな美しさをもたらし、また、異境への憧れを育みました。生家「米惣」が扱ったハイカラな品々は東京から廻船でもたらされ、兄圓三は留学先のヨーロッパから異国の風を吹き込みました。

関東大震災からの帝都復興における中心的な役割を果たし、やがてその仕事の苛烈さによって非業の死を遂げる圓三はまた、東京の「川」にいくつもの橋をわたしました。圓三の橋は、先進国の最新技術を基礎とし、江戸情緒を活かした伝統的なデザインを描きました。そのありようは、隅田川をセー又川に見立てた杳太郎の詩の世界と共鳴しています。

東日本大震災は「津波」をもたらし、あらゆるものを酷く悲しく奪い去りました。宮城県巨理（わたり）郡巨理町も、町の半分が浸水、ここでも大切な多くが被災しました。阿武隈川の河口に位置する江戸家も甚大な海水被害を受けましたが、4代目清吉が蒐集した文芸資料、地区の文書、江戸家の関連資料などの2万点は水に浸かりながらも救い出されました。今回あらわれた森鷗外の『北条霞亭』直筆原稿も、その

企画展示「津波被災からあらわれた直筆資料 — 杵太郎の〈敬愛〉、鷗外の〈微笑〉 —」

うちの 1 点であり、被災によって見出された資料です。

巨理（わたり）は、もと「日理」として『続日本紀』にその名があらわれ、「川の渡し」、「水をわたる」が語源とされます。鷗外の自筆原稿は、その真偽の鑑定を江戸家から依頼された杵太郎の、深く篤い思いをのせて、まさしく水をわたり、時をわたってあらわれました。本展示では、そうした被災した文化財を救い出す「文化財レスキュー」の視点も加えて、鷗外自筆原稿と杵太郎筆写原稿とを照らします。

そしてこの企画は、牽牛織女が天の川をわたる 7 月 7 日(土)、中島国彦氏（早稲田大学名誉教授・日本近代文学館専務理事）による公開講演会「森鷗外と木下杵太郎をつなぐもの— 鷗外原稿の筆写から浮かび上がる敬愛の念」と結びます。展示と講演、ふたつの世界を、ぜひご自身で架橋してみてください。本展示に用意しています「意見票」への書き込みも、その方途のひとつとなりましょう。

さまざまの「水を、わたる。」について考えをめぐらせていただけましたら幸いです。

2018 年 6 月

愛知県立大学日本文化学部・不安と生の研究会



木下杵太郎
〔愛知医科大学時代〕



木下杵太郎記念館外観

(写真：伊東市立木下杵太郎記念館蔵)

<寄稿>

木下杵太郎と太田家の人々

(伊東市教育委員会 島田冬史)

伊東市立木下杵太郎記念館は、木下杵太郎（太田正雄）の実家である「米惣」太田家の店舗及び住居部分を使い、昭和60年に開館した。通りに面して建つ土蔵造りの展示室建物は、明治40年築の店舗部分で、国の登録有形文化財である。裏手には、天保6年築の伊東市指定文化財「木下杵太郎生家」が、当時の佇まいのままに保存されている。生家は晩年の随筆「すかんぼ」に描写されている台所であり、店舗部分は「和泉屋染物店」や「柏屋傳右衛門」の世界を彷彿とさせる。

これらは杵太郎が生まれ育った当時の建物群で、そこここに杵太郎文学の香りが漂っている。

杵太郎の実家である太田家は、杵太郎の祖父にあたる初代太田惣五郎が、天保6年に興した米屋「米惣」が発祥である。二代惣五郎の頃、米以外にも呉服や書籍、雑貨類を商うようになった。祖父の実家である太田本家が廻船業を営んでいたため、そこを通じて江戸・東京の様々な文物が米惣にもたらされた。今も残る錦絵などの商品から、昔日が偲ばれる。

杵太郎はこの米惣に、7人きょうだいの末っ子として生まれた。

長女「よし」は、父である二代惣五郎の没後、婿惣兵衛と共に米惣を切り盛りし、繁栄に導いた女丈夫である。杵太郎は実父を早くに亡くし、実母も体が弱く実家に帰省していることが多かったため、この長姉夫婦を父母と呼んで育てている。

次女「きん」、三女「たけ」は明治女学校に学んだ才媛で、夏休みに帰省した彼女たちが浜辺で歌った英語の讚美歌は、杵太郎の幼心に深く刻まれ、彼の「異国情調」の骨格をなしたものである。続く四女に「くに」という姉がいたが、早くに養女に出、早逝したため逸話は残っていない。



中学時代の杵太郎ときょうだい達

明治10年、長男として賢治郎が生まれ、14年に次男圓三、そして18年に末っ子の正雄が誕生した。

長兄賢治郎は静岡中学校を卒業し、後に長姉よし夫婦の養子となって四代目米惣当主となるが、地方政治を志し、伊東町議会議員・静岡県議会議員・同議長などを歴任した後、戦後第二代伊東市長も務めた。

次兄圓三は静岡中学から東京府尋常中学校に転校し、一高、帝大へと進学し、土木工学を専門とした。卒業後は逓信省鉄道作業局に入り、鉄道技師として活躍、「鉄道始まって以来の天才」と称された。

柰太郎の本業は医学者で、皮膚科学の世界的権威であった。彼は東京帝国大学医学部教授として医学界の頂点を極めたわけだが、彼自身は医者になる気は全くなかった。

家族の勧めによって医者になるべく独逸学協会中学に入学したものの、この頃は画家を志望していた。この夢は家族の反対により潰えたが、一高時代にはドイツ文学の研究者を望んだ。しかしこれも実現せず、いやいやの形で東京帝国大学医科大学へと進んだのである。柰太郎は「我々の通つて来た時代」で次のように述べている。

文學藝術に對する愛はやはり或る遺傳的の素質と境遇とに原く。年の間隔のやや違ふ予の姉、兄たちにもさう云ふ素質があつた。彼等は予の青年時代に予の文學を好むことを嫌つたが、予の之を好むに至つたのは彼等が既にさう云ふ雰圍氣を予の周圍に作つたのが原因の一半になつてゐる。

柰太郎のエキゾチシズムの根源を担つたのが姉たちだとすれば、その文学的感興を育んだのは兄たちである。先の随想には、「仲兄は文學界派—藤村、透谷を愛した。バイロン、シエリイ等の英國ロマンチック派がその背景であつた」とあり、圓三の文学愛好が柰太郎に影響を与えたことがわかる。

一方で、柰太郎を医学の道に留めたのも、ゲーテを引き合いに説得した圓三の言葉にあつたようだ。

兄圓三と柰太郎は大変仲が良く、柰太郎の中学から大学時代にかけて、東京白山御殿町で同居していた。圓三は先に触れたように大学卒業後鉄道の仕事に就き、将来を囑望される優秀な技師として評価された。

それゆえ、明治43年から2年半の間、欧州・米国に官費留学することとなった。

この頃の文学青年達は、ヨーロッパ、特にパリに憧れを持っており、杵太郎たちは「巴里の美術家や詩人などの生活を空想し、そのまねをして見たかった」（「パンの會の回想」）ことから、「パンの會」と名付けた会を作り、芸術家の交流サロンを目指した。こうしたパリへの憧れは、文学・美術の影響によるところが大きいのであるが、多くの青年達が遠い存在としてパリを見ていたのに比べ、身内がヨーロッパに留学している杵太郎にとっては、パリはもっと身近な存在として感じられていたのではないかと思われる。圓三から送られてくる絵葉書に、胸を熱くしたことであろう。

しかし杵太郎がヨーロッパに留学できたのは、それから10年後の大正10年になってからであった。彼は大正13年に帰国し、県立愛知医科大学（現名古屋大学医学部）教授に就くのだが、その留学中に関東大震災が発生している。

この震災により、杵太郎は東京に残していた書籍を失うという被害を受けたが、圓三にとってはより大きな変転をもたらした。当時圓三は鉄道院工務局工事課長の職にあつたが、震災復興のために作られた帝都復興院に土木局長として招かれたのである。圓三はここで東京の街づくりの中心を担い、近代都市東京を作るべく尽力した。特に橋梁にはこだわりを持ち、帝都の顔として位置付けられた永代橋や清洲橋をはじめとする墨田川架橋には、復興予算の多くがあてられた。また皇居近くの堀に架けられた八重洲橋は、杵太郎のデザインに基づくものであった。

だが、この復興事業に伴う労苦は圓三の精神を苛み、大正15年3月、自ら命を絶つという結果になってしまった。

圓三がこの世を去った年、杵太郎41歳。自身は盲腸炎の悪化から命の危機にまで瀕し、和辻哲郎宛の書簡に「申分なき厄年相味ひ候」と記している。

傷心の杵太郎が愛知を離れ、仙台へと赴任していったのはこの年の10月であった。



太田圓三
〔復興局時代〕

（写真：伊東市立木下杵太郎記念館蔵）

<寄稿>

震災と文化財レスキュー

(亶理町立郷土資料館 学芸員 菅野達雄)

私の勤務地である亶理町は宮城県南東部に位置し、北は阿武隈川が流れ、西は阿武隈高地のなだらかな山が連なり、東は太平洋を望み、気候が温暖で自然環境に恵まれた町である。しかし、東日本大震災では甚大な被害を受けた。特に江戸時代には阿武隈川水運の拠点として栄え、明治時代以降は物流や漁業で賑わい豪商も多かった沿岸の荒浜地区は壊滅的といっているほどの被害を受けた。この荒浜地区には旧家が多く残っていて、なかでも明治から昭和初期の豪商だった江戸家には貴重な資料が数多く残されていた。そして、6月から2回に分け、全国から集まった多くのボランティアの協力得てレスキュー作業を行った。このような大災害の後、文化財を救うという行動はどうしても遅れがちになる。遅れば遅れるほど資料の劣化と散逸は進むのだが、市町村の担当者は人数に限りがあり、また、優先すべき事項が人命とライフラインの復旧となるとどうすることもできない。文化財レスキューは地域を超えた横と縦の連携が必要不可欠であると痛感した。

レスキューした資料は古文書、書画、調度品、祖先が収集したコレクション品など段ボール箱にして300箱以上に及んだ。一部資料は水損し、特に貴重なものは奈良国立文化財研究所で真空凍結乾燥を行った。保管については当館の収蔵庫だけでは足りない状態で、隣接市である角田市の施設を借りて保管した。レスキューした資料の種類は多岐にわたり、また、膨大な数であり、さらに、水損している資料も多かったため、何をどのように、どう進めていけばよいのか判断に苦しんだ。しかし、このままでは資料の劣化も予想できたことから、まずはどのような資料があるのかを把握することからはじめた。

平成26年5月には国立奈良文化財研究所で真空凍結乾燥処理を行っていた資料が返却された。その数は資料箱で100箱を超えていた。それまでどのくらいの数の資料が奈良に行っていたのか把握できていなかったため、返却された資料の数に呆然とせざるを得なかった。いったん

は終了していた整理作業を再び行うこととなったが、ノウハウはできていたので作業はスムーズに進み、100箱の整理は2カ月ほどで終わることができた。

資料が多岐にわたるため、その修復についてはどんな方法で、どんなところをお願いし、どう進めていけばよいのか、とても悩んだ。この件については幸いにも多くの専門家の協力を得ることができ、修復を進めることができた。しかし、修復には時間と費用がかかるため、1年に数点ずつの修復となっている状況である。

整理、修復と同等に重要なのは被災してレスキューした資料がいかに貴重で、重要なものなのかを広く知ってもらうことである。そのため、一定の整理が済んだ段階から積極的に情報を発信している。これまで企画展示、研究者への資料の提供、資料を基にした講演会などを行い、多くの観覧者が訪れ、多くの研究者と出会うことができた。今後も情報を発信し続け、これらの資料が活用されていくことが望ましいと考えている。

震災によって思わぬ資料と出会い、その対応にあたることになった。圧倒的な存在感ゆえ、緊張で震えることもあった。震災から7年が過ぎ、修復や詳細な調査も進んではいるが、残されている課題は多く、時間も必要である。自分が勤めている間には解決できないこともあると思う。今はきちんと次世代に繋げていけるように基本事項をまとめておくことが自分の役割であると考えている。



レスキューの様子
(写真：巨理町立郷土資料館提供)

<展示品解説>

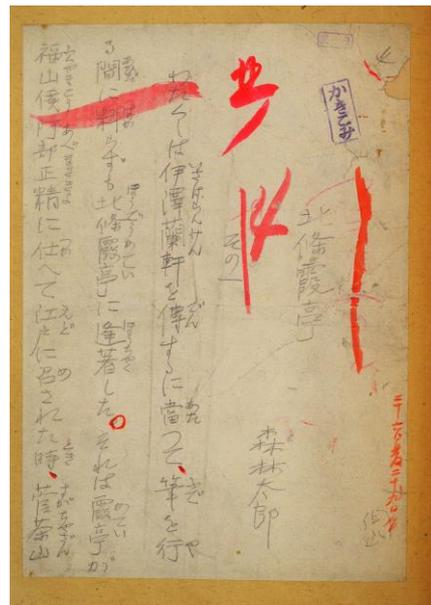
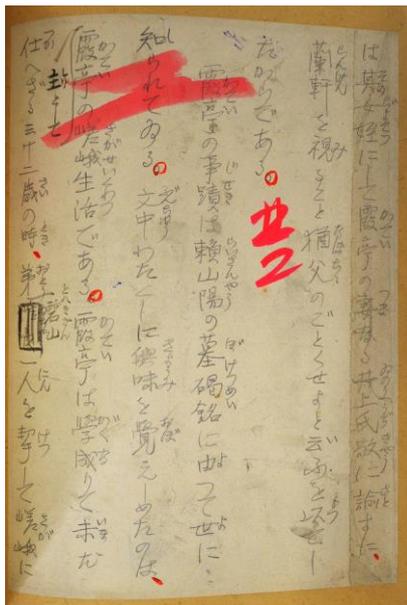
森鷗外『北条霞亭』原稿(写真)

亘理町立郷土資料館保管「江戸清吉コレクション」(個人蔵)

鉛筆書き、縦27センチ、横19センチ、9枚

鷗外最後の史伝『北条霞亭』は、大正6(1917)年10月から「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」に連載が始まるが、同年12月に中絶、翌大正7(1918)年2月から「帝国文学」に発表されるも、大正9(1920)年1月、当誌の廃刊によりまたも中絶、同年10月～翌大正10(1921)年11月の「アララギ」誌上で完結という運命を辿った、作者55歳から59歳にわたる作品である。鷗外は翌年の大正11(1922)年7月、60歳でこの世を去る。

この原稿は、新聞掲載の冒頭1回分にあたり、その折の割り付けが朱で入れられている。これを所蔵した亘理の豪商、4代目江戸清吉(1884-1938)は、出版社や古書店から当時において安価にながれた直筆資料を蒐集し、その真偽の鑑定を信頼する関係者に求めていた。本原稿の鑑定を依頼されたのが件の木下杵太郎であり、原稿を綴じた題籤の「森鷗外先生北条霞亭原稿」は、杵太郎の手跡とされている。



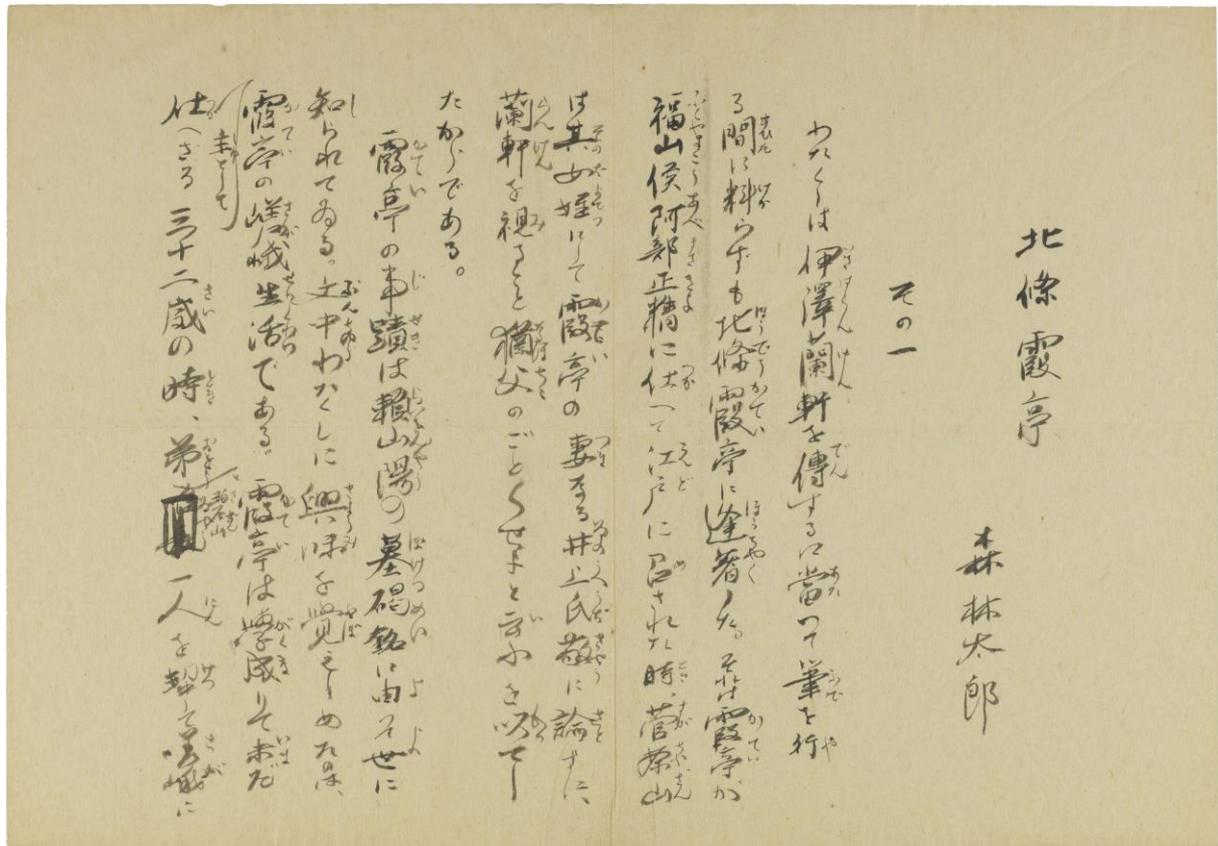
森鷗外『北条霞亭』原稿〔一部〕
(亘理町立郷土資料館保管)

木下杵太郎『北条霞亭』筆写原稿(写真)

県立神奈川近代文学館所蔵

墨書き、縦 28 センチ、横 40 センチ、6 枚

鷗外自筆の原稿鑑定を互理の江戸清吉から依頼された杵太郎が、自身の手元に残すべく、字数行数から訂正紙の貼附まで、ほぼ原本どおりに模写をした「作品」と言える。医師よりも画家になりたかった杵太郎であればこそ、画家が大家の画を模写して修行をするような心持ちであったのかも知れないと、この忠実な筆写原稿は、見るものにさまざまな思いを想像させ、寄り添わせ、かき立てる。杵太郎の思いの込められた筆の運びには、多くの言葉を要さない。



木下杵太郎筆写『北条霞亭』原稿〔一部〕

(県立神奈川近代文学館所蔵)

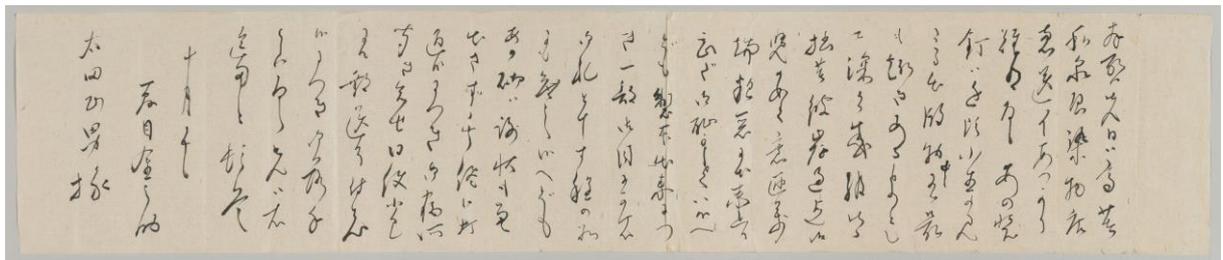
夏目漱石書簡(大正元(1912)年10月5日)(写真)

県立神奈川近代文学館所蔵

同年に刊行された杢太郎『和泉屋染物店』が送られてきたことへの礼状。「あの装釘は近頃小生の見たる出版物中にて最も趣きあるものとして深く感服仕候」と、装幀を絶賛する漱石は、自身も杢太郎同様、自著装幀へのこだわりを深くする作家であった。

杢太郎への御礼にと出版されたばかりの『彼岸過迄』を届ける旨をしたためるが、「ご覧の如く意匠万端粗悪に出来上り甚だ御恥かしく」といった謙遜ぶりである。

この2年後、漱石はよく知られた『こゝろ』を「ふとした動機から自分で遣つてみる気」になって、「箱、表紙、見返し、扉及び奥附の模様及び題字、朱印、検印ともに、悉く自分で考案して自分で描いた。」(『こゝろ』自序)と、自装するにおよぶ。



木下杢太郎宛 夏目漱石書簡 (大正元年 10 月 5 日)
(県立神奈川近代文学館所蔵)

北原白秋書簡(大正2(1913)年6月3日)(写真)

県立神奈川近代文学館所蔵

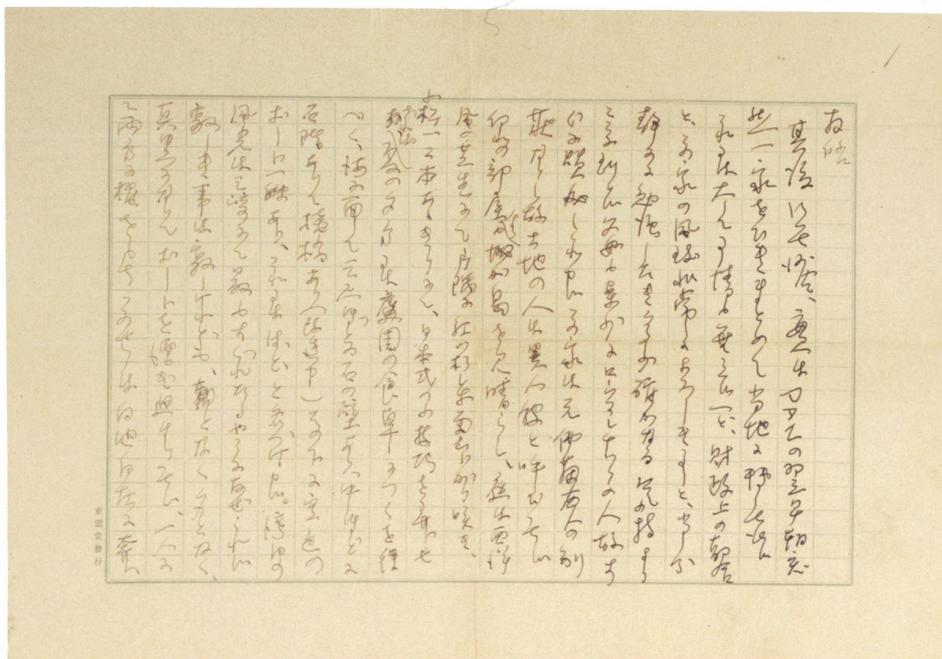
白秋は前年の夏、隣家の人妻松下俊子との恋愛によって俊子の夫から姦通罪で告訴され収監された、いわゆる「桐の花事件」(その折のことを歌い込んだ第一歌集『桐の花』(大2.1)による)を経験した。渦中心の慰めとしていた神奈川三崎へ、俊子との結婚を機に東京から一家で移住したのが、この書簡のひと月前である。書簡の前半、三崎の風情を心地よく伝えてはいるが、「寂しき事は寂し」、「東京が恋しく相成り候」、「たゞ赤裸々

な自分のみ立ちはだかり、何かと真摯な省察の時を得る事も多く、非常に元気にも相成候、少々この二三ヶ月センチメンタルになり過ぎたるあとなれば思ひきり乱暴に力をつけ居候」といった心情を覗かせてもいる。

そうしたなか、出版を控えた詩集『東京景物詩及其他』(大2.7)の挿画を杵太郎に依頼したものの、「あのまゝにては如何にも色刷の度数も多く一寸木版には六つかしき様子にて御座候故、甚だ我儘にて申にくけれどももつと簡単に版下に適したるもの(絵はやはりあの絵が所望に候)描いて頂け申すまじくや」として、詩集の世界観の構築に余念のないさまがうかがえる。

また、同詩集の出版元東雲堂は、白秋が主宰し室生犀星や萩原朔太郎を世に出した詩誌「朱鸞」の出版元でもあったが、「少々東雲堂と折合あしくなりかたがた編集不便に付廃刊と致候 店にてはまだ出したき様子なりしも、何となくあの店に反感起り候故やめに致候」として、「朱鸞」廃刊の理由が東雲堂との関係悪化にあったことを伝えており、興味深い。

前年に自然解散した芸術至上主義グループ「パンの会」の仲間であり、「杵様」と宛名する杵太郎への親しさから、白秋の飾らぬ心情がほの見える。



木下杵太郎宛 北原白秋書簡 (大正2年6月3日)〔一部〕
(県立神奈川近代文学館所蔵)

宮城歴史資料保全ネットワークの活動

鷗外の自筆資料は偶然にも津波被災からの資料レスキューの活動によって発見されました。そうした資料レスキュー・保存・修復の活動を行っているのが、阪神淡路大震災以降に設立された、歴史資料保存ネットワークです。神戸大学を中心に組織されましたが、やがて各地にも災害などを契機として個々に同様の組織が設立され、今はそれらを連合する全国組織になっています。そうした中で、鷗外の資料を発見したのはNPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク（以下「宮城資料ネット」）を中心としたグループです。ここでは、その宮城資料ネットの活動をいくつかの刊行物から紹介します。

『歴史遺産を未来へ』は、2011年3月の東日本大震災直後の非常に困難な資料レスキュー活動、そして宮城資料ネットが立ち上がる契機となった2003年7月の宮城北部連続地震、さらには2008年6月の岩手・宮城内陸地震での活動などを念頭に、古文書などの文化遺産をいかに将来に手渡していくのかということテーマに行われたシンポジウムの報告集です。宮城以外の地域からも報告があり、学・官・民の連携による資料保全のシステム作り、文化財救済のネットワーク構築、実践例が示され、白熱した議論が展開されました。

『災害を超えて』は、宮城資料ネットの設立10年を記念したシンポジウムの報告集です。二つの自治体から資料保全の具体的な取り組みが紹介され、今後の課題が明確に提示されています。資料保全について住民に周知すること、資料の基礎調査（どこに何がありどのような被災を受けたか否か）の重要性、情報の共有の仕方、レスキューの拠点の作り方の問題等々です。また、教育・研究者の側からは、資料ネットとかかわった史料調査や歴史研究活動の成果も報告されています。

『ふるさとの歴史と記憶をつなぐ』は、まさに東日本大震災からの復興の中で歴史資料等の保全活動を通して、ふるさとの歴史と記憶を後世につないでいくため、いかほどのことが成し遂げられつつあるか、シンポジウムで議論した報告集です。被災した民間所在史料の救済・保全活動の現状報告から始まり、震災の前後における地域古文書の会の活動、原発にかかわる旧警戒地域の困難な中でのプロジェクトを組んでの活動等々、地域に

とって残すべき記憶とはどのようなものなのか、深く考えさせる内容です。

「歴史資料を未来へ」は冊子ではありませんが、非常にコンパクトに資料ネットの活動を伝える印刷物（ポスター的なもの）です。そこには、災害に備えつつ、それでも災害にあったら、どのように対応するのか、きわめて实际的・具体的な資料救出の仕方が提示されています。そして、保全と継承のために簡便な修復方法、整理と記録の方法等も図入りで示されています。書物や冊子のように備えるのではなく、誰でも手軽に手元に置ける大変便利な「テキスト」だと思われれます。

このほか、ここでは全国の資料ネットワークの活動にかかわるものも2冊展示しました。全国の活動は24年目となりました。これからも続けていかなければならない活動です。こちらも、どうぞ併せてご覧ください。

＜展示資料＞

『歴史遺産を未来へ』

（東北アジア研究センター報告3号、2011年、東北大学）

『災害を超えて 宮城における歴史資料保全 2003－2013』

（NPO法人 宮城資料保全ネットワーク、2014年、蕃山房）

『ふるさとの歴史と記憶をつなぐ

東日本大震災 1400日・史料保全の「いま」と「これから」』

（被災地フォーラム宮城報告書、2015年、神戸大学）

『歴史資料を未来へ』

（NPO法人 宮城歴史資料保全ネットワーク、蕃山房）

『歴史文化を大災害から守る 地域歴史資料学の構築』

（奥村弘編、2014年、東京大学出版会）

『震災復興学 阪神・淡路20年の歩みと東日本大震災の教訓』

（神戸大学震災復興支援プラットフォーム編、2015年、ミネルヴァ書房）

心にも亦四季が有る。

～『百花譜』の世界～

宮崎 真素美

(日本文化学部国語国文学科)

新しい季節の訪れは、ときめきや期待、心配や不安など、私たちの元にとりどりのさざ波を運びます。今から 75 年前の春、みずから描いた「染井吉野」(そめいよしの)の折枝画(せっしが：花木の一枝を折って画題にしたもの)に、杵太郎はこう書きつけました。

「わかかった時分桜の花は美しいと思ひ、そのうちでも染井吉野が尤もあはれ深いと感じた。中春の夕方の気分といふものは名状しがたいものであつた。今年は春が寒くて花がわるいが、今日伝研でつくづくと之を眺めて見ても殆ど感興らしいものが湧かない。心にも亦四季が有る。 昭和十八年四月十二日」

上の引用にある「伝研」とは、当時、杵太郎が勤めていた東大医学部の附属施設であった伝染病研究所のことです。描かれた染井吉野は可憐ですが、どこか寂しげに映ります。彼の気分を反映していたのでしょうか。日本全体が戦争の騒擾に覆われていた長い狂騒の季節、灯火管制下の深更に植物と向き合い、自身の奥にしまわれた静寂にひとり降り立っていたように思われます。これらの植物図譜は昭和 18 年 3 月から 20 年 7 月の間に、全部で 872 点が描かれました。

「ひめおどりこさう」(姫踊子草)、「かざぐるま」(風車)、「ゆすらうめ」……、画題となった植物の名の響き、繊細な彼らの姿、杵太郎のつぶやき。それぞれの頁は静けさをそっと引きよせ、与えてくれます。

また、同じ年の秋、「落葉松」(らくうしょう)とともに次のように書きつけられています。

「昭和十八年九月十九日 大学 「森鷗外博士の訂正『オルフェウス』」の原稿を浄書して細川侯爵に送る。其写しを颯田琴次君に送る。」

「森鷗外博士の訂正『オルフェウス』」とは、鷗外が翻訳したドイツ語の歌詞「オルフェウス」自筆原稿の体裁を、インクの色や筆跡にわたって紹介するところからはじまる文章です。鷗外のたぐいまれなる語学力と、人に対する真摯なありようを、ここでも「敬愛」を込めて綴っています。「北条霞亭」筆写に通ずる姿勢を見ることのできる文章です。

『百花譜』は杵太郎自身によって名付けられましたが、実のところ目を引くのは、植物の葉や莖の「あお」の多彩さのように感じられます。戦時下、杵太郎が静寂のうちに込めた生命力も、『百花譜』において見落としてはならない側面のように思われます。

鷗外 - 杵太郎の敬愛の行方——石川淳『森鷗外』を補助線として

若松伸哉（国語国文学科）

「抽斎」と「霞亭」と、両方とも結構だとか、撰択は読者の趣味に依るとか、漫然とさう答へるかも知れぬひとびとを、わたしはまた信用しない。[…]ではおまへはどうだときかれるであらう。ただちに答へる、「抽斎」第一だと。そして付け加へる、それはかならずしも「霞亭」を次位に貶すことではないと。——石川淳『森鷗外』

鷗外晩年の文学を彩る「渋江抽斎」（1916年）「伊澤蘭軒」（1916-1917年）「北条霞亭」（1917-1921年）という〈史伝〉。無名の人物について考証的に肉薄していく鷗外の史伝に対して、「はなはだ小説作法的な仕方で混沌を切り開いて行つた文章」と、はじめて高い評価を与えたのが、作家・石川淳による評論『森鷗外』（1941年12月、三笠書房）である。

石川淳は同書のなかで史伝最初の「渋江抽斎」を「第一」と評価しつつ、「北条霞亭」も同等に評価する。石川は「渋江抽斎」について、氾濫する鷗外の抽斎への親愛の情を看取り、「書かれた人物が生動し、出来上がった世界が発光するといふ稀代の珍事」と、その文学世界を賞賛する。

鷗外六十歳、一世を蓋ふ大家として、その文学的生涯の最後に、「霞亭生涯の末一年」に至つて初めて流血の文字を成した。作品の出来ばえ、稟質才能の詮議は別として、右は通常これから小説に乗り出さうといふすべての二十代の青年が立つであらう地点である。——石川淳『森鷗外』

一方、「北条霞亭」への石川淳の評価はやや複雑である。石川は、「北条霞亭」執筆の途中、鷗外が「自分の内部の情緒が結託したところの、親愛する人間像を追究して行く途中で、鷗外はその対象の人物のいやなものにそろそろ気がつき出したに相違ない」と推測する。鷗外が理想的人物として見ていた北条霞亭が、実は「俗情満々たる小人物」であり、「北条霞亭」執筆の途中でそれに気がつき、自分自身に内攻していく鷗外の心中を石川淳は描き出すが、しかしそうした作者森鷗外自身に「流血」をもたらした点を石川淳は評価している。

さて、このように鷗外最晩年の作品「北条霞亭」は、鷗外を考えるうえで重要な作品である。石川淳は、鷗外の北条霞亭への親愛が「北条霞亭」という作品を書かせ、それが鷗外自身に「流血」をもたらしたと読み取ったが、鷗外への敬愛の念から「北条霞亭」の原稿を写した木下杵太郎は、鷗外の霞亭への思いをどのようにくみ取っていたか。もちろんそのことを示す資料はないが、「北条霞亭」をめぐる一連の出来事は、鷗外そして杵太郎のそれぞれの敬愛の行方を想像させる興味深い事象となっている。

また、師・森鷗外への木下杵太郎の敬愛の念はよく知られているが、杵太郎は「森鷗外先生に就いて」（『文藝春秋』1933年4月）という文章において、鷗外を語りながら、夏目漱石にも言及している。このなかで杵太郎は第一高等学校時代に「夏目先生」から英語を教わっていたことを語り、他者への評価が厳しい鷗外が「夏目さんをば大に重じて居られた」ことを回想している。杵太郎そして鷗外からの漱石への敬愛の念もこの文章は伝えているのである。

不安と生の研究会

皮膚科医としての木下杵太郎／太田正雄

—ハンセン病研究への取り組み—

田上 恭子（看護学部）

＊ 日本のハンセン病政策

1907(明治40)年	「癩予防二関スル件」制定
1931(昭和6)年	「癩予防法」制定（「癩予防二関スル件」の改正）⇒在宅患者の強制隔離
1948(昭和23)年	「優生保護法」制定 ⇒対象にハンセン病患者が加えられる
1953(昭和28)年	「らい予防法」制定（「癩予防法」の改正）⇒強制隔離の基本方針は存続
1996(平成8)年	「らい予防法の廃止に関する法律」制定 「優生保護法」廃止

＊ 太田正雄の立場：強制隔離・断種に批判的であり、化学療法の開発を夢み、らい菌の培養に力を注いだ。

○ 太田正雄のハンセン病会議出席とその報告

1930(昭和5)年 国際連盟癩委員会（バンコク開催）出席。

1931(昭和6)年 レオナルド・ウッド記念基金国際癩会議（マニラ開催）出席。

↓

1931(昭和6)年 『バンコック及びマニラに於ける国際癩會議』—「東京醫事新誌」2718, 2720号, 1931年

「隔離は癩予防の爲に必要事であるが、その唯一の法と倣すに足らぬ。その缺點をば他の法を以て緩和せねばならぬ。而して唯傳染の危険有る者に對してのみ行ふべきである」

（成田 稔『ユマニテの人—木下杵太郎とハンセン病』日本医事新報社, 2004年, p.63より引用）

○ 小川正子『小島の春』（長崎出版, 1938年）への批評に表れる太田正雄の思い

「なぜ其（ハンセン病の）病人はほかの病氣をわずらふ人のやうに、自分の家で、親、兄弟、妻子の看護を受けて病を養ふことが出来ないのであるうか。

強力なる權威がそれは不可能だと判断するからである。人々は此病氣は治療出来ないものとあきらめてゐる、それ故隔離が唯一の根絶策だと考へる。」

太田 正雄（1940）. 動畫「小島の春」 日本醫事新報, 935, 57-58. (成田, 2004, p.4より引用)

「癩は不治の病であらうか。それは實際今まではさうであつた。然し今までは、此病を醫療によつて治癒せしむべき十分の努力が盡されて居たとは謂へないのである。殊に我國に於ては、殆ど其方向に考慮が費されて居なかつたと謂つて可い。そして早くも不治、不可治とあきらめてしまつて居る。従つて患者の間にも、それを看護する醫師の間にも、之を管理する有司の間にも感傷主義が溢れ漲つてゐるのである」

「癩根絶の最上策は此科學的治療に在る。そして其事は不可能では無い。『小島の春』をして早く此『感傷時代』の最終の記念作品たらしめなければならない……」太田 正雄『葱南雜稿』東京出版, 1946年

（山川 基他（2009）. 日本のハンセン病強制隔離政策と光田健輔 就実論叢（就実大学）, 39, 145-168.より引用）

＊ “ユマニテ humanité”に特徴づけられる木下杵太郎/太田正雄

○ ユマニテとは：「生活を支えてきた意欲や生活感情や美意識，創作活動の基底に厳として存在する精神，人間性」（杉山 二郎『木下杵太郎—ユマニテの系譜』平凡社, 1974年, p.3）, 「真の自由への人間解放を目指し，古典研究によつて教養を高め，人間愛に基づく人間の尊嚴の確立を図るなどといった広い意味」（成田, 2004, p.44）。

○ 木下杵太郎は鷗外をユマニストと評しているが，杵太郎自身もまたユマニストであると論じられている。

❖ 杵太郎の鷗外評論—木下 杵太郎（1932）. 森鷗外 岩波講座『日本文学』

「鷗外の一生涯は、何人も同じく言ふが如く、休無き精進であつた。そして尚古と進取との両遠心力が鞏固の調帯の両極に激しい廻転をなした。真の意味でのユマニストであつた。一専門、一遊戯の一極に集中する所謂天才肌の人ではなかつた。文学と自然科学と、和漢の古典と泰西の新思潮と芸術家の感興と純史的の実直とが、孰れも複雑な調帯の両極を成してゐる」（杉山, 1974, p.6より引用）

❖ 名古屋での杵太郎の講演『日本文明の未来』（1925年）

「医学者と雖も単に医学の技術家としてその方面の技術だけに没頭しなければならぬといふ筈はありません。やはり学者の一人として自己の学問、自己の立場の上に哲學的考察を加へて、自分の為てゐる事に文明批判上のベルスペクティブを附ける必要があると思ひます」（杉山, 1974, pp.259-260より引用）

❖ 東北帝国大学時代，木下杵太郎／太田正雄は「森鷗外の会」を發足（1937年）

左翼運動で墮いた学生の思想善導・保護を目的とし、鷗外の著作を読むことでユマニズムの真髓に触れさせる会として出發（杉山, 1974）

著作物の管理とテクノロジーと (島嶼国で考えたこと)

奥田隆史 (情報科学部)

日本においては有線電話の普及率は100%となったところから携帯電話が急速に普及した。我々は、まず有線電話が普及し、次に携帯電話、そしてスマートフォンへという流れでコミュニケーションに関する道具を変えてきた。道具はだんだんと新しくなるものだと信じている。また世界中の人々がそのようにして道具を手に行っていると考えがちである。

しかし国によっては、有線電話普及率が100%にならなくとも、いきなり携帯電話／スマートフォンが普及するというパターンも珍しくない。このパターンであれば、有線電話のための回線を引く必要はない。電信柱を設置する必要もない。いきなり携帯基地局を設置し、いきなり携帯ショップで携帯電話を販売すれば良い。アフリカのある国には銀行がなかったのであるが、いきなり携帯電話が普及し、携帯電話を活用したいいきなり送金システムが機能した。21世紀は、いきなりAI (人工知能)、いきなりIoT (モノのインターネット) が普及する可能性もある。テクノロジーの移転を考えるとときにはそんなことも考える必要がある。

造幣局がなくても石貨(せきか)からいきなり仮想通貨(ビットコイン)が普及する可能性もある。ビットコインの基礎技術はブロックチェーンという技術である。ブロックチェーンを利用すると、そのものがどのような経路、履歴でここにあるのかが記録されている。つまり食品の流通で話題となるトレーサビリティ(Traceability, 追跡可能性)が確保され、物品の流通経路を生産段階から最終消費段階あるいは廃棄段階まで追跡が可能になる。

ところで、我が国では、財務省が決裁文書を書き換えた事件を契機に、政府は決裁文書の電子化を加速化しようとしている。電子化しただけで改ざんが防止できるわけではないため、コアのテクノロジーとして、ブロックチェーンの導入が考えられている。ブロックチェーンはあらゆる著作物の管理にも応用可能である。一方で、“この作品は誰の作品?”という謎ときや論争がなくなってしまうのはつまらなくなるような気がする。

追伸: 木下杵太郎と森鷗外の物語で連想したこと—今も夢中で追いかけている

浜田省吾のアルバム『My First Love』というアルバムに「初恋」という楽曲がある。この楽曲の歌詞には彼が影響を受けてきたアーティスト(ビートルズ、ボブ・ディラン、ジャクソン・ブラウン、ブルース・スプリングスティーンら)の名前や楽曲名が登場する。彼の自伝的楽曲で、“ドーナツ盤に刻まれた3分間の物語 少年と世界を繋いでいた … オレの初恋はRock'n'Roll そして今も夢中で追いかけてる オレの恋人はRock'n'Roll … そして今も夢中で追いかけてる”というフレーズを連想した。

不安と生の研究会

不安と生の研究会

比較鑑賞

木下木下太郎『百花譜』×小磯良平『薬用植物画譜』

藤原 智也
(教育福祉学部 教育発達学科)

木下木下太郎(1885-1945)は『百花譜』にて、とても魅力的な植物画を残しています。ここに木下の多彩さを見ることができると同時に、詩(言葉)とは異なる表現から木下の別の一面について考えるための手がかりがあるように思います。

ある人の作品を鑑賞するとき、類似した作を残した別の人の絵と比較することで、新しい発見を得られることがあります。ここでは、小磯良平の『薬用植物画譜』で描かれた作品と比較対照しながら、木下の特徴に迫ってみたいと思います。小磯良平(1903-1988)は昭和期のアカデミズムを代表する洋画家です。東京美術学校(現東京藝術大学)在学中に帝国美術展覧会で異例の特選を受賞し、同校を首席で卒業した後に、戦後は東京藝術大学の教授を務めました。

二人は、震災と戦争についての類似した経験を持っています。一つめは、関東大震災(1923)の知らせを、海外滞在中に聞いたということです。このとき、木下はドイツ、小磯は朝鮮にいました。医学と美術という分野の違いはありますが、若くして東京に出てきて西洋由来の学問的な教育を受けたのちにエリートとして活躍していた二人が、自身を育んだ日本の窮状を知り、何もできない外国の地にてどのような思いを抱いていたのでしょうか。二つめは、第二次大戦時に、国家権力からの表現に対する抑圧の中で、それぞれの立場で絵を描いていたということです。木下は『百花譜』を、小磯は従軍画家として戦意高揚を目的とした一連の戦争画を描いていました。そこには、戦争、そして国家に対するそれぞれの複雑な感情が、言葉ではないかたちで表われていたように思います。

『百花譜』は木下が58歳から60歳(1943-1945)の時に手がけた写生872枚からなります。一方、『薬用植物画譜』には小磯が52歳から64歳(1955-1968)の間に描いた150枚の植物画が収録されています。植物と向き合い絵を描いたそれぞれの年齢は似ていますが、戦時中と戦後成長期で、日本の時代状況は対照的です。

小磯の絵は、欧州美術史におけるルネサンスから新古典派に至る光学的な写実性に基づいた描写に特徴があり、この植物画でも鋭い観察眼のもとでそれが発揮されています。この叙事的な小磯の作と比べると、木下の絵がとても叙情的であるように感じられます。植物と余白の関係性、有機的でやわらかい線描、錯誤の過程を思わせる色使いなどにそれを見てとることができるでしょう。従軍画家を経て感情を抑制しながら描いた小磯の植物画と対比させることで、自然科学的な訓練を受けて医学を自身の生業とした木下が描いた表現にある人文学的な側面が際立つように思われます。



ひがんばん

左：木下木下太郎 右：小磯良平

さふらん

左：木下木下太郎 右：小磯良平

木下杵太郎と関東大震災

外国語学部 原 潮巳

関東大震災が発生した1923年（大正12年）9月1日、杵太郎はヨーロッパに留学中であった。日本から遠く離れた異国の地で、彼は故国の大惨事に何を感じたのか。9月1日から11月29日までの日記は残念ながら散逸している。8月上旬から滞在していたベルリンから9月3日付で日本に送られた書簡によれば、この日の朝に新聞で事態を知ったようである。興味深いのは、次のように都市計画の観点から、既に東京の復興について述べていることである。「今後も首都は東京に候べきも、建築のこと大工夫を要し候こと々存候 木造は飛行機戦に防禦力なく、高層楼は六十年目毎の大地震に對し大危険、是れ當面の大問題と存候然し東京大改造の際に少しは傳統上の美觀を存し、且つ亦全部歐米のまねでなき新様式案出せられ度ものと餘計のことなから考へられ候。」

このような観点を杵太郎にもたらしたのは、4歳年上の兄である太田圓三（1881-1926）の影響ではないだろうか。「鉄道始まって以来の天才技術者」と呼ばれた圓三は、震災直後に設立された帝都復興院の土木局長に抜擢され、東京の近代都市化を推進する後藤新平のリーダーシップの下、永代橋、清洲橋等の隅田川の橋梁設計に尽力した。他方、圓三は、同時代人である漱石が日本の近代化に対して感じていたアンビヴァレントな思いを共有していたとされる。橋のデザインにあたっては、芥川龍之介や木村壯八、そして弟の杵太郎等の芸術家から意見を聞き、景観に配慮したものを目指した。だが、汚職事件等による心労から1926年に自殺。以下は兄の死の直後に杵太郎が発表した鎮魂の作「永代橋工事」の一節である。

基礎はなるべく近世的科學的にして、
建築様式には出来るだけ古典的な
壮重の趣味を取り入れて造って貰ひたい。
などと空想して得心した。

それなのに、同じ工事を見ながら、
今は希望もなく、感激もなく
うはの空にあの轟轟たる響を聴き、
ゆくりなくもさんさん涙ながれる。

不安と生の研究会



木下杵太郎生家概観



木下杵太郎生家内部
(写真：伊東市立木下杵太郎記念館蔵)



水損した古文書

資料整理の様子
(写真：亶理町立郷土資料館提供)

文化財レスキュー



<謝辞>

今回の展示にあたりご協力いただきました関係機関の方々に、深く御礼を申し上げます。

各機関の概要、活動内容は下記ホームページからご覧いただけます。

■ 県立神奈川近代文学館

<http://www.kanabun.or.jp/>

■ 伊東市立木下杵太郎記念館

http://www.city.ito.shizuoka.jp/shougai_gakushuu/html/shisetsu/hpg000002733.html

■ 亶理町立郷土資料館

<http://www.town.watari.miyagi.jp/index.cfm/32.html>

■ NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク

<http://www.miyagi-shiryounet.org/>